

箸墓古墳(桜井市)

纏向遺跡から見た箸墓古墳/3世紀半ば頃の築造か？/左手が後円部、右手は前方部

 [video](#)



近づいて周濠(溜池として拡張されている)越しに見たところ/左手が後円部、右手は前方部/左端に三輪山が見える

 [video](#)



そこで、括れ部辺りを見たところ



同じく、後円部を見たところ/左手は三輪山



同じく、前方部を見たところ



これは茅原大墓古墳の後円部墳頂から見たところ/右手前が後円部、左奥は前方部



これはホケノ山古墳の後円部墳頂で、後円部を後ろから見たところ



左手前が後円部、右奥は前方部/この辺りの周濠部分は埋められて水田となっている



そこで、右手の前方部方向を見たところ



墳丘の反対側に回って、前方部から後円部方向を見たところ/道路が墳形に合わせてカーブしているのが見て取れる



そこで、左手を見たところ/ここが前方部の前面



この辺りも周濠部分は水田となっている/前方に鳥居が見える



ここが拝所/「大市墓」として第7代孝霊天皇皇女の倭迹迹日百襲姫命の墓に治定されている/卑弥呼の墓ともされるが？



墳丘上で宮山型特殊器台と都月型特殊器台形埴輪、そして二重口縁壺が採集されているらしい/墳丘表面は葺石で覆われているようだ

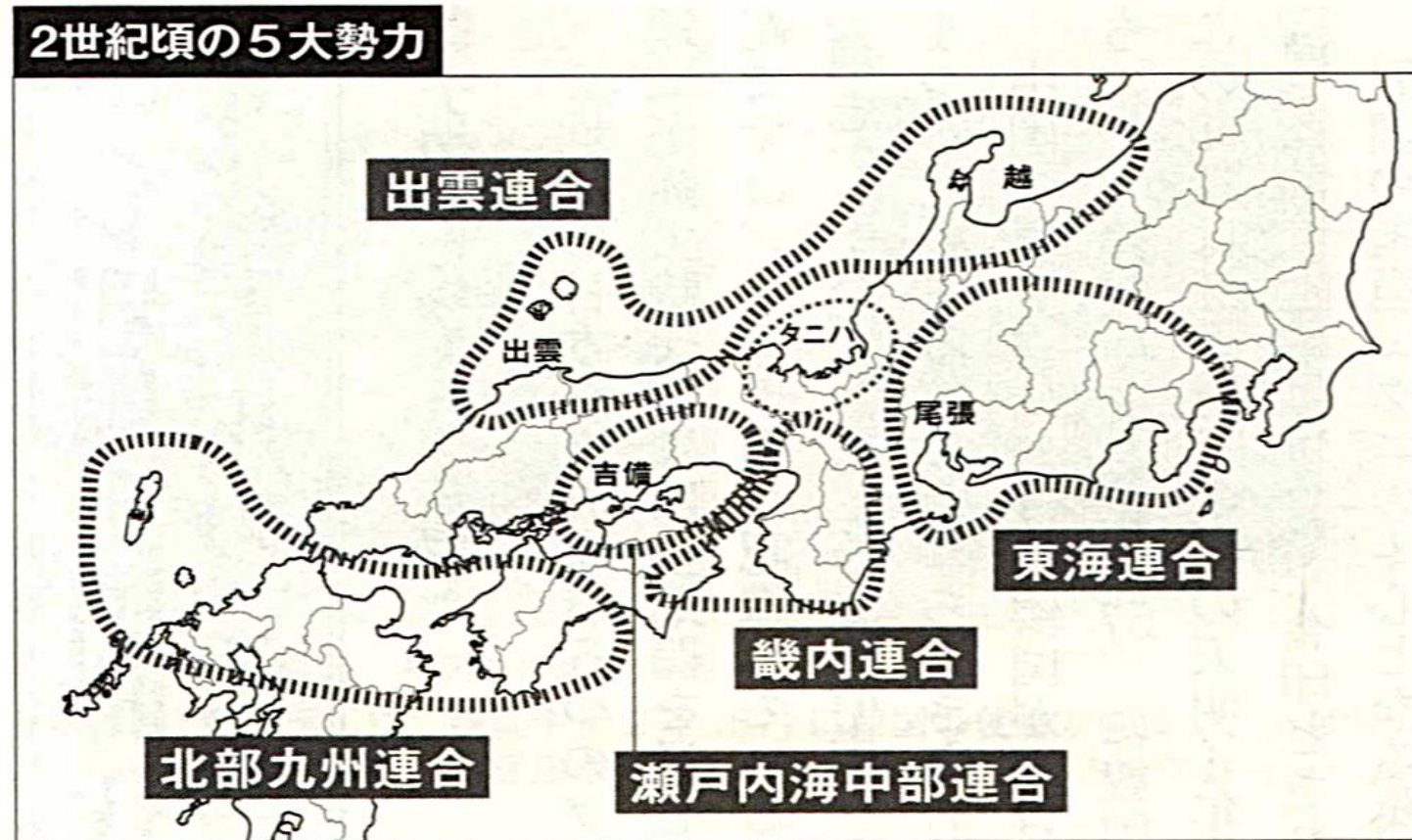


少し退いて見たところ



さて、諸説あるようだが、箸墓古墳が卑弥呼の墓であることの蓋然性は高いように思える。以下、箸墓古墳が卑弥呼の墓として造営されたとされる背景についてみてみたい。

2世紀には5つの勢力が大きなブロック連合（物流ネットワーク）を形成していたという

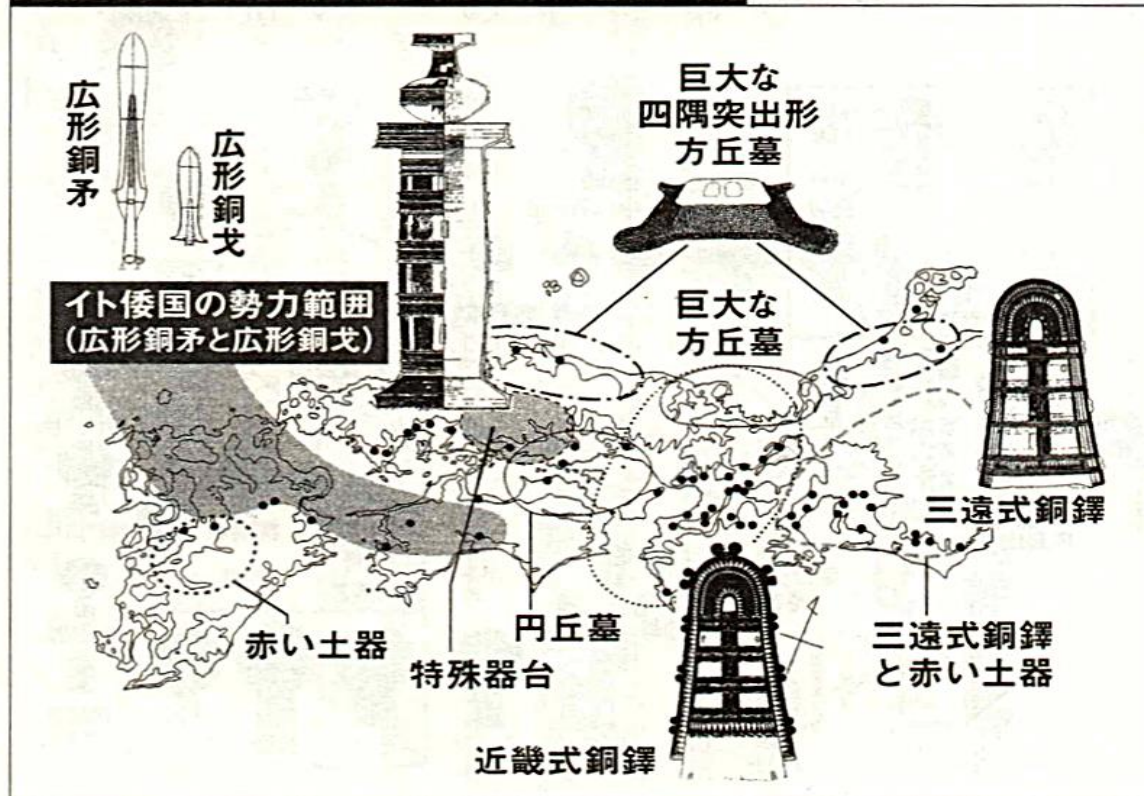


弥生時代のクニグニは自給自足ではなく交易を行っていた。交易によって各地域ネットワークが形成され、物流センターとなったクニを中心に5つの勢力が形成された。

「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 より

それは、それまでの祭祀方法を共有した地域に符合する

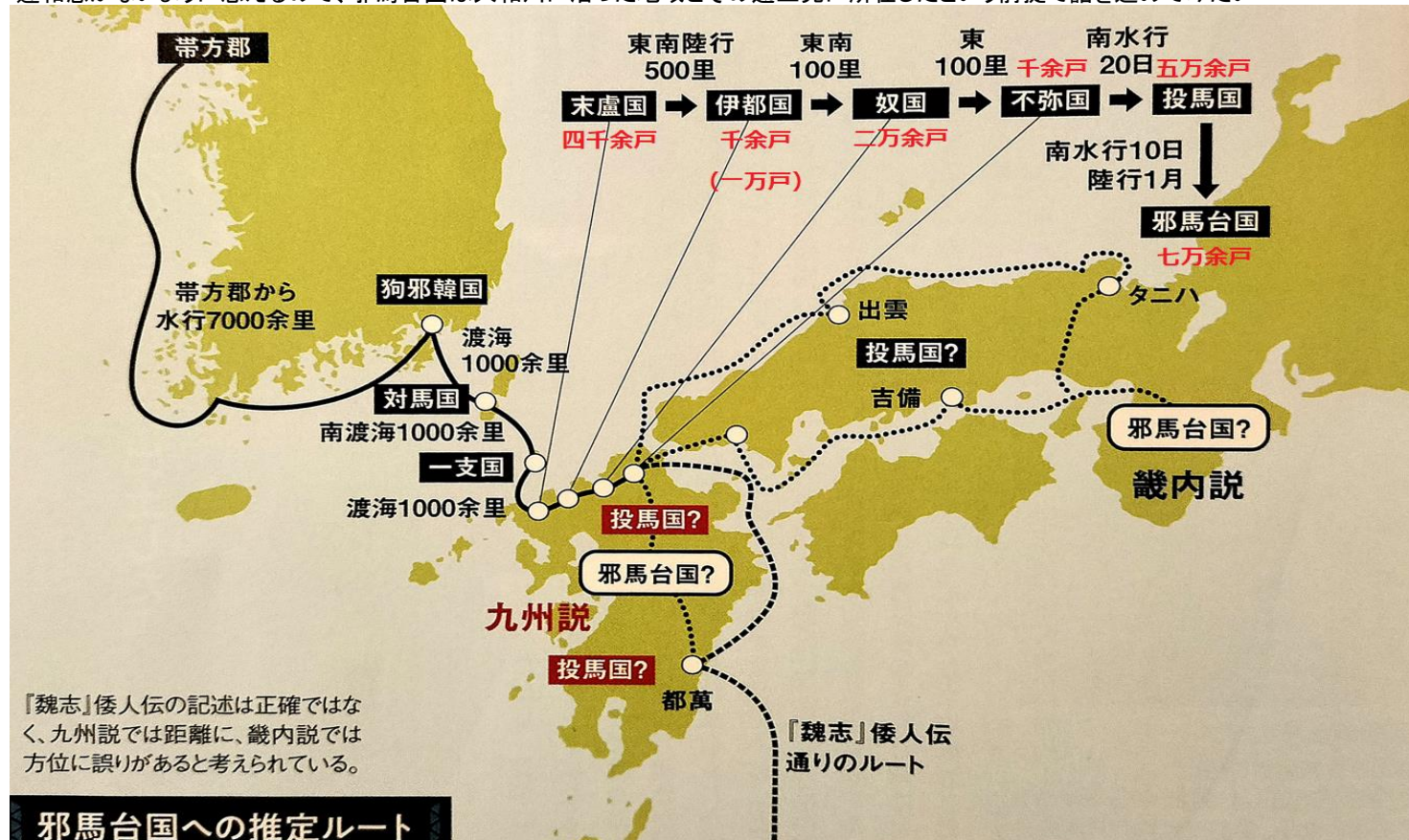
図3 倭国乱の頃の地域勢力とそのシンボル



2世紀後半、後漢王朝が衰退するとイト倭国の支配力や權威に影を落とし、各地域の首長墓やマツリに新たな変化が現れはじめた。

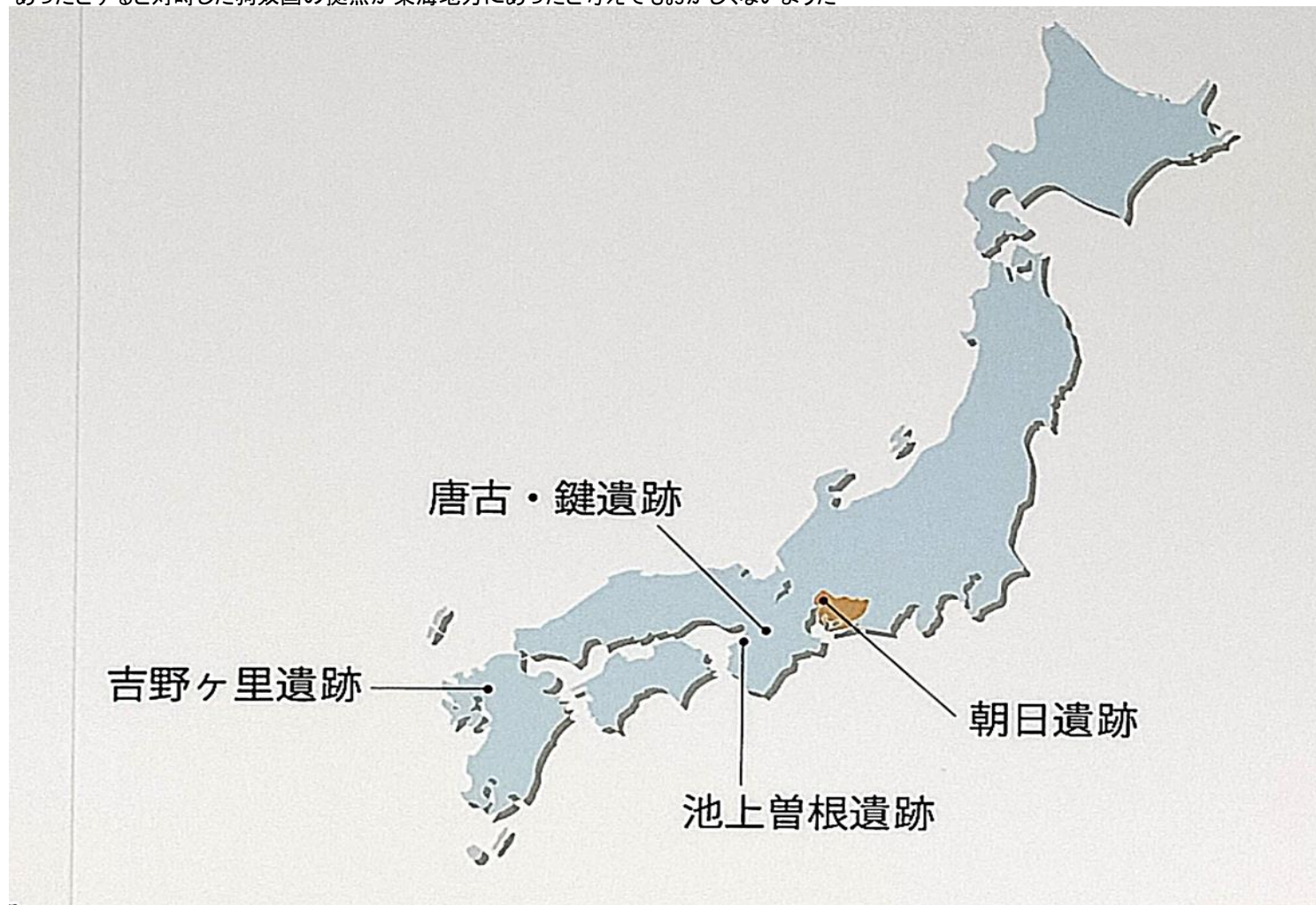
「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 より

邪馬台国の所在地についても諸説あるようだが、ここでは魏志倭人伝の方位の記述が、当時の中国王朝では「倭国は南の方向に細長い」という認識であった可能性があるということらしいので、東を南と記されたとして下図を見てみると、不弥国から日本海ルートで出雲(対馬国)～タニハから水上回廊を通して畿内(邪馬台国の所在地)という行程が、魏志倭人伝の水行・陸行の日数に一番違和感がないように思えるので、邪馬台国は大和川に沿った地域とその遡上先に所在したという前提で話を進めてみたい



「今こそ知りたい 日本の古代史」/宝島社 より 一部(赤字)加筆

「あいち朝日遺跡ミュージアム」のキャプションにあった「弥生巨大集落の大きさ比較」の遺跡位置を見ると、畿内に邪馬台国があったとすると対峙した狗奴国の拠点が東海地方にあったと考えてもおかしくないようだ・・・



「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 の要旨によると、北部九州では1世紀に奴国、2世紀に伊都国が盟主となった(中国との交易におけるアドバンテージ)が、2世紀後半になると倭国大乱(178年～184年あるいは146年～189年)/鉄を中心とする物流システムの再編成が起こったとされる
当時の中国王朝への朝貢の推移を見てみると、

57年 「漢委奴國王」印

107年 倭国王・師升(師升は伊都国の王?)

との記述があり、その後、倭国大乱が起こったとされる(1世紀後半頃は奴国、2世紀前半頃は伊都国の時代ということになるようだ)

さて、倭国大乱の様相を見てみると、次のようなプロセスを踏んでいるらしい(赤字の部分など私見を含みます)

◆ 倭国大乱(178～184年)

第一次倭国乱(物流ルートの確保をめぐる対立)

背景:氷上回廊ルートを巡る軋轢

結果:畿内と瀬戸内海中部が結びつく

第二次倭国乱(畿内連合・瀬戸内海中部連合VS北部九州連合)

背景:後漢王朝の衰退

結果:畿内・瀬戸内海中部と北部九州が結びつく

◆ 卑弥呼の共立(畿内連合の中核である邪馬台国の内陸部を拠点とした女王国連合の成立)/**第一次女王国**/3世紀初め頃

邪馬台国の所在地は畿内の大和川沿いの広いエリアにあり(奴国の3.5倍?)、それまではあまり開発されていなかった纏向の地を、畿内連合・瀬戸内海中部連合・北部九州連合のリーダーが結集して卑弥呼を共立した女王国の拠点としたのでは・・・

なお、邪馬台国のエリアは大和川沿いに展開する加美・久宝寺遺跡群、東郷・中田遺跡群などや唐古・鍵遺跡を含むと思われるが、纏向の地は含まれていなかったのでは・・・つまり、3世紀になる頃に弥生時代の拠点集落を凌駕する大規模遺跡として突如出現したエリアだったのではなかろうか

その後の動きをまとめると次のようになるようだ

- ◆ 220年 後漢王朝の滅亡
- ◆ 239年 卑弥呼が魏に朝貢
親魏倭王/名実ともに倭国の統一王(ただし、東海連合・出雲連合は加わらず)/初期ヤマト王権の誕生
出雲国が女王国政権に帰順する
- ◆ 247年 卑弥呼が帯方郡に狗奴国と戦っている状況を報告
- ◆ 魏から張政(魏の軍事顧問)が卑弥呼政権のもとに檄文と錦の御旗を持って派遣される
- ◆ 248年、卑弥呼死す～男王(執政王)～卑弥呼の宗女:台与
台与を倭王とする女王国が続く(**第二次女王国**)
狗奴国が女王国政権に帰順する
- ◆ 張政が台与からの丁寧な返礼とともに魏に帰国する
- ◆ 265年 魏滅亡
- ◆ 266年 台与が西晋に朝貢
- ◆ 箸墓古墳が造営され、定形型的前方後円墳を共通の祭祀形態とした倭国が確固たる体制を確立した
なお、箸墓古墳の造営時期であるが、上記の流れで考えると260年前後では・・・

ここで、出雲連合(出雲国を盟主とする)及び東海連合(狗奴国を盟主とする)がいつの時点で初期ヤマト政権に帰順したかを想定してみたい

まず、狗奴国であるが魏から張政(魏の軍事顧問)が卑弥呼政権のもとに檄文と錦の御旗を持って派遣され、卑弥呼の後を継いだ台与からの丁寧な返礼と

ともに魏に帰国する間の時期と思われる/その期間はおそらく2～3年、長くて5年以内(張政は途中一時帰国したことも考えられるが・・・)とみるのが妥当

かも・・・/「親魏倭王」としての二代目・台与が倭国の王として国際的にも認められていることを悟った結果ではないだろうか

定形型の前方後円墳の東海地方への波及を見てみると、4世紀前半頃から見られるようになるようだ/これは第二次女王国が成立してまもなく台与政権に帰順した結果を反映しているのでは・・・(西日本の各地では3世紀後半頃から定形型の前方後円墳が造営されるようになるが、東海地方では約半世紀後になってようやく造営されるようになる/これは帰順のタイムラグを踏まえてということでは・・・)

それでは、出雲国は？

国譲りの神話にみるように、第一次女王国成立には加わっていなかったと思われるが、卑弥呼が親魏倭王として中国王朝に認められたことを知ってその重大性を理解し、まもなく卑弥呼政権に帰順したのではないかと思われる(ちなみに、帯方郡への報告に出雲国は入っていない・・・)

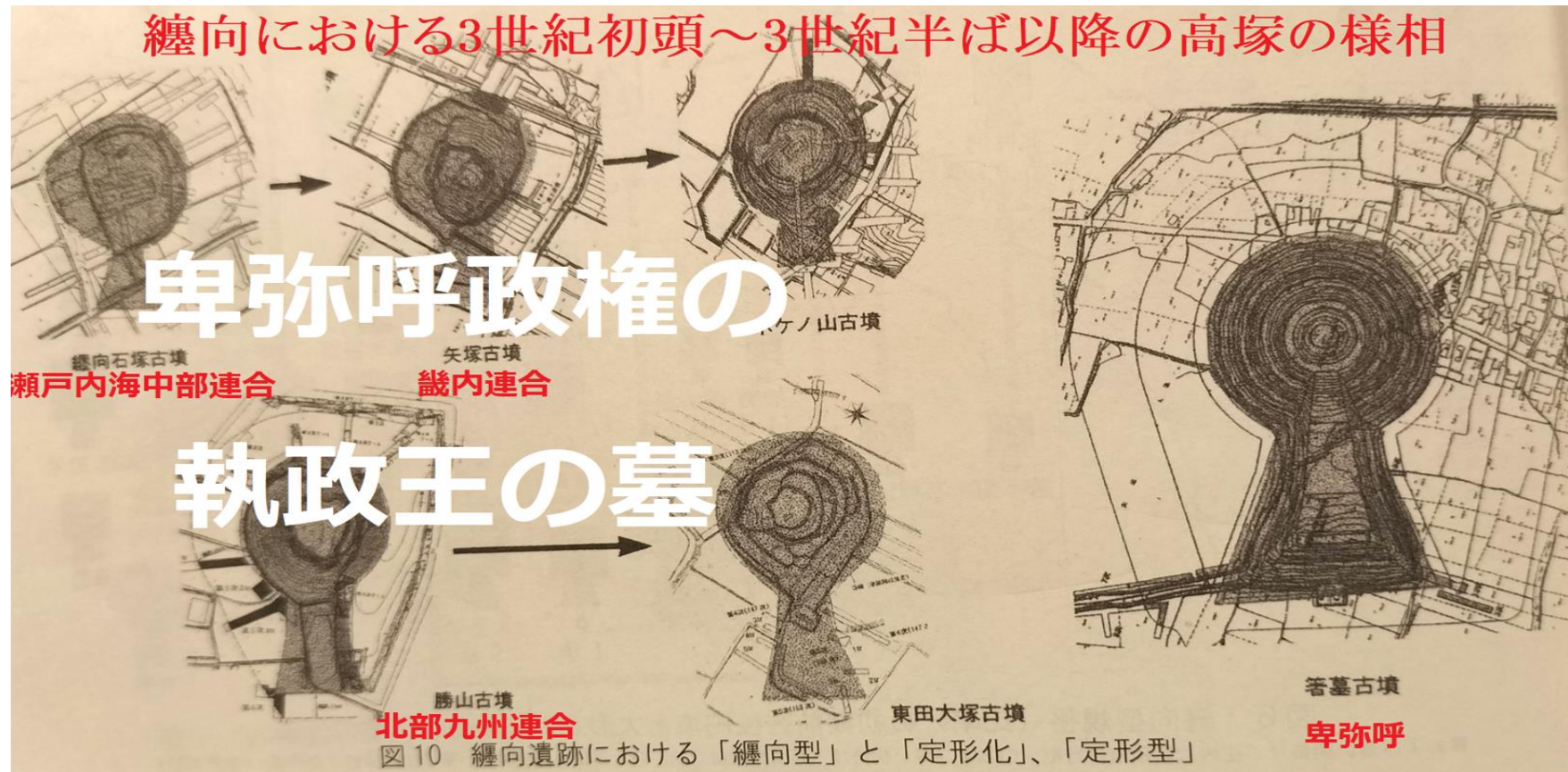
ただし、定形型の前方後円墳の出雲地方への波及を見てみると、4世紀後半も末頃からようやく見られるようになるようだ/これは出雲地方のそれまでの墓制である四隅突出型墳丘墓が3世紀前半で姿を消し、替わって出雲の東部地域で大型の方墳が造営されていく(この大型の方墳は四隅突出型墳丘墓の延長線上にあるもの/「再生された四隅突出型墳丘墓」という見方があるらしい)/そして定形型の前方後円墳が造営されるのは4世紀末頃のようなのだ/なお、出雲地方以外の出雲連合に加わっていた地域では、やはり4世紀前半頃から定形型の前方後円墳の造営が開始されているようだ

ところで卑弥呼の死後、13才の台与が女王国を引き継ぐことになるわけだが、その台与が祭祀のみならず政治・軍事的運営を成し得たかと言えばそんなことはあり得ないと思えるのが自然だろうと思われる/つまり、台与は祭祀を司る神聖王(祭祀王)で、政治・軍事の執行をサポートする執政王の存在が欠かせない/祭祀王は権威、執政王は権力の二重統治体制であったということか・・・/卑弥呼も然りだと思われ、卑弥呼・台与はシャーマンであり祭祀王として崇められたが、実務(政治・軍事的な執行)は執政王としての男王が各連合の協業で遂行していたと思われる

シャーマニズムは特別な能力を持つ呪術者(シャーマン)を通じて神々となつがっていると考える原始宗教の一つの形態で、シャーマンの多くは女性で、神がかりして神の言葉を人々に伝える事のできる特別な人間であり、時として大きな力を持った歴史があるという/3世紀という時代にシャーマンを神聖王(祭祀王)として崇めることは普通にあったことと思われる

次に、纏向の地に3世紀前半に出現した纏向型前方後円墳は誰の墓なのであろうか

3世紀前半に出現した纏向型前方後円墳は卑弥呼政権(第一次女王国政権)を政治・軍事的に支えた上記のリーダー達(執政王)の墓と見ることもできるかも！？



2023年11月25日 東京フォーラム「前方後円墳創生」の配布資料に一部(赤字)加筆

なお、「高塚」とは高い墳丘墓＝古墳のこととし、それまでの低い弥生墳丘墓とは一線を画するとした表現とお考え下さい！

さて、箸墓古墳は卑弥呼の墓なのであろうか？

魏志倭人伝には卑弥呼は248年頃に亡くなったとある/箸墓古墳は台与政権が確固たる倭国としての体制を確立した頃(つまり、出雲連合・東海連合も加えた

倭国としての体裁が整った頃)に、定形化された前方後円墳を倭国の共通の祭祀形態として採用することによって、倭国をまとめるシンボルとして、纏向の地

に女王国の奥津城として造営されたのではなかろうか(卑弥呼の遺骸はそれまでは別の墳墓・・・たとえば三輪山の中腹辺り！？・・・に埋葬されており、再葬墓という形で箸墓古墳に納められたとみてはどうだろう！？)

諸説あるようだが、台与の墓とされる西殿塚古墳/左手が後円部、右手は前方部

 [video](#)

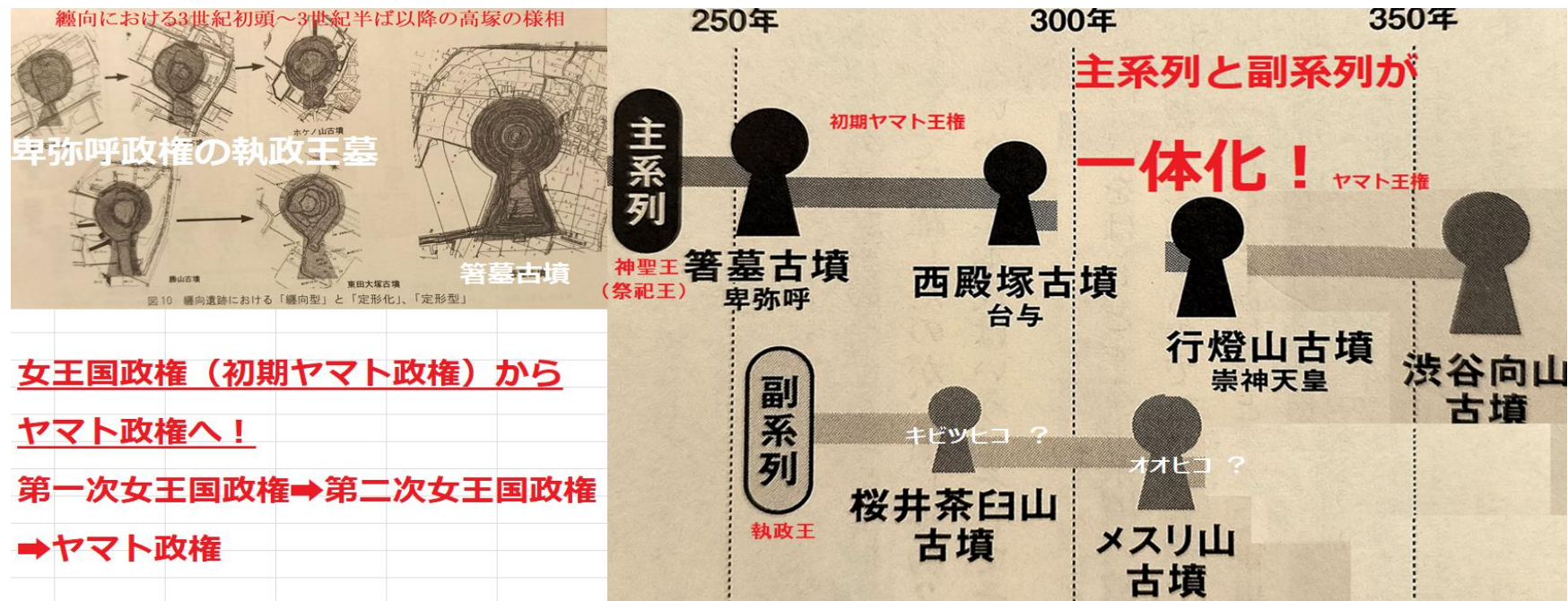


では、台与以降の倭国はどのようになって行ったのだろうか

倭国全域がまとまって行く中で、畿内(大和の地)に政権を支える実力集団が成長してくる/それは後の畿内に勢力を伸ばした主要な氏族であると思われる/
箸墓古墳も造営され、定型型の前方後円墳を共通の祭祀形態とした倭国の確固たる体制が確立し、執政王の業績が大きく評価されるようになり、その権力も大きくなったと思われる

そして、台与の次には神聖王(祭祀王)と執政王の両方を兼務する大王が登場する/それが崇神天皇であり、実在するとされている最初の大王(天皇)なの
ではなかろうか/卑弥呼・台与政権の時代を初期ヤマト政権、そして崇神天皇以降の時代をヤマト政権と呼ぶこととしたい

卑弥呼・台与政権(初期ヤマト政権)からの崇神天皇以降のヤマト政権につながっていく道筋と政治状況については、以上のようなことのように考えられる
権威と権力を併せ持つ王の出現(執政王が祭祀権も行使する)、それこそがヤマト王権の誕生(崇神～垂仁～景行～・・・)の実相と思われるが・・・



女王国政権(初期ヤマト政権)から

ヤマト政権へ!

第一次女王国政権→第二次女王国政権

→ヤマト政権

倭王権と前方後円墳/岸本直文 より 一部改変及び合成

さて、行燈山古墳は宮内庁も治定している通り、崇神天皇の墓とされているようだ。（諸説あり、行燈山古墳の墳形が前方部が少し開く箸墓古墳・西殿塚古墳の系譜を引いており、女性の墓ではないかとの見解から崇神天皇の墓は渋谷向山古墳ではとの考えもあるようだが、渋谷向山古墳を崇神天皇の墓とすると倭の五王に比定される天皇がある程度特定されていることからその間の天皇の治世が窮屈になり過ぎるように思える）

行燈山古墳の墳形が前方部が少し開くいわゆる撥型であるのは女性の墓という事ではなく、祭祀王の墓という意味合いなのではなかろうか/そう考えると、崇神が執政王と祭祀王を兼ねた大王であることを示す墳形なのではないだろうか

なお、以下の別稿を参照してください！

・ [神門5号墳\(市原市\)](#)

- ・ 那珂八幡古墳(福岡市)
- ・ 原口古墳(筑紫野市)
- ・ 双水柴山古墳群(唐津市)
- ・ 纏向型前方後円墳(桜井市)

ここは纏向遺跡の居館域





なお、箸墓古墳造営後の第二次女王国（初期ヤマト政権）が、いわゆるヤマト政権（崇神天皇を実在する最初の大王とする）に移行していくプロセスについては別稿の「行燈山古墳（天理市）を参照してください！